



(黒石)

青森・大光寺新城跡遺跡

だいこうじしんじょうあと

- 1 所在地 青森県南津軽郡平賀町大字大光寺字三村井
- 2 調査期間 第四次調査 一九九六年(平8) 四月～九月
- 3 発掘機関 平賀町教育委員会
- 4 調査担当者 葛西 勳
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代後期～一七世紀初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大光寺新城跡遺跡は、平賀町中心部から北西約1kmに位置する、中世から近世初頭まで存続した平城である。北側の引座川、西側の六羽川とに挟まれた微高地に築城され、主郭・北郭・南郭・袖郭で構成されていたと考えられている。津軽氏が津軽地方を平定するまで南部氏の一拠点となつたところである。現在付近一帯は住宅地となつているものの、近年の団地造成・町

道拡幅事業などに伴い、これまでに三次にわたる発掘調査を実施している。一九八九年の第一次調査では、主郭の北端を調査し、竪穴遺構六棟、溝状遺構一条、堀跡一条を検出した。続いて一九九〇年の第二次調査では、主郭の南側を調査し、竪穴遺構二二棟、井戸跡三基、溶鉱炉五基、溝状遺構五条、集石遺構一基、堀跡三条を検出した。さらに一九九五年の第三次調査では、堀跡四条、竪穴遺構一棟、溶鉱炉跡及び焼土遺構一基を検出している。

木簡(柿経)は、一九九六年の第四次調査において、北郭東端付近で検出した堀の堆積土から出土した。この堀は大光寺城を取り囲む外堀と考えられ、検出した部分の規模は、幅約二〇m、深さ二m以上に及ぶ。また、堀内部には土橋と堀の水量を調節するためと思われるしがらみ状の遺構も検出している。堀の年代は、出土陶磁器などから、一六世紀から一七世紀初頭にかけてのものと推察され、出土した柿経もこの時期のものと考えられる。この調査では、この他卒塔婆・碑伝なども検出している。

今回出土した柿経は『妙法蓮華経』八巻を記したもので、計六五点にのぼるが、ここではこのうち巻品が特定できるものなど八点について報告する。柿経は、出土状況からみて、堀に投棄されたものであるう。出典が各品にわたっているので、本来八巻一セットがまとまっていたものと考えられる。

8 木簡の釈文・内容

- (1) ×華經□ (55)×20 081
- (2) 却從地獄出當隨畜生 (15下1~2) (142)×20 081
- (3) 行彼佛世人咸皆謂之實是聲聞而富樓那 (27下7~8) (208)×18 081
- (4) 當是人去阿耨多羅三藐三菩提 (31下13~14) (188)×15 081
- (5) 長舌上□梵世一切□ (51下18~19) (84)×15 081
- (6) □能持是經者則為己見我亦見多 (52中12~13) (185)×18 081
- (7) 時日月淨明德佛 (53下7~8) (142)×17 081
- (8) 衆天龍夜叉乾 (57下2) (69)×18 081
- (1)~(8)は『妙法蓮華經』八巻を書写した柿経で、釈文の下に『大正新脩大藏經』第九巻法華部の頁・段・行を示した。このうち(2)は巻第二譬喻品第三、(3)は巻第四百弟子受記品第八、(4)は巻第四法師品第十、(5)(6)は巻第六如来神力品第二十一、(7)は巻第六葉王菩薩本事品第二十三、(8)は巻第七觀世音菩薩普門品第二十五の一節である。いずれも上下両端も欠損しているため、全体の形状は不詳である。幅一~二cmの非常に薄く削り出した板に書かれているため、厚さの記載は省略した。

9 関係文献

平賀町教育委員会『大光寺新城跡発掘調査報告書・第一次発掘調査』(一九八九年)

同『大光寺新城跡発掘調査報告書・第二次発掘調査』(一九九〇年)
(渡部 学)

